

寄稿 2

我が来し方を思う

第 26 期 畠山 信孝



我が母校も今年で創立 80 周年を迎えることは慶ばしい限りである。

戦後の混乱止めやらぬ昭和 28 年 4 月、私達 26 期 (新 8 期生) は希望と期待に胸をふくらませて入学した。ノンボリの在郷のいなかが驚ろかさされたのは、入学時にすでに自分の希望大学をもってつき進んでいる同期生のすがたを見るに及び愕然とすると同時に何と自分は田舎者よと思わざるを得なかった。そのショックはやがて受験競争の地獄の戦線につながって行く。

昭和 31 年 3 月に卒業し東京へ。そして、最早、戦后ではないという池田内閣の所得倍増政策の昭和 35 年に大学を卒業した。いや応なく高度成長の波の中に企業の先兵として組み込まれ、家族帯同で転居すること 11 回。東京を皮切りに、関東甲信越、北陸地方と知人親せき一つとしてない未知の地に新規開拓要員として舞いおりて行く。本人は企業興亡の使命感に燃えて行くから生きがいもあるが、同伴する家族にとってはたまったものではない。幸いにして愚痴一つこぼさず陰でささえてくれた妻には今さらながら感謝すると共に、それにも増して子供達は転校に次ぐ転校でさぞかし苦勞もあったであろう。その心情を察して余り在るものがある。しかし、曲りもせず人並みに成人してくれた事は、せめてもの幸いに思う。土地神話、終身雇用神話の時代の最後のランナーとして平成 9 年 60 才の定年のテープをきった。この間日本も世界有数の経済大国にまで成長したが、一方では青少年の犯罪、企業モラルの低下、今やあらゆる局面に於て指導層の精神喪失が現われている。これがバブル後の日本が果てしなく墜ちて行っている要因でもあろうか。豊かさを追求する事だけに専念し、何か大切なものを怠り、忘れて来たのではないかと慙愧と反省の念にかられる。

幸いにして定年後も県人会、同窓会、その他の団体にかかわる機会を得、これらの場を通じていささかでも是正し貢献できればと祈りながら活動している昨今である。

1 年有余をもって古希を迎える身なれども「臨終を習うて諸事を決すべし」のたとえのごとく、臨終

を定年と心に定めた。真に日本民族に立脚した日本精神と誇りを取りもどす為、失われた戦後 60 年の空白をうめるべくその活動に生ある限りの人生を走り続けるであろう。東京同窓会設立に尽力された先人の努力を無にすることなく、継続は力なりの信念に於て、これから続々と続くであろう後輩を信じて、今後とも老骨にむち打ちながらも陰ながら応援して参りたいと思う。来たるべき時代に向けて飛翔する能代高校東京同窓会に栄光あれ。

寄稿 3

能高五日会の歩みはじめ

第 46 期 能高五日会会長 石井 喬

本来、能代高校のOBで結成されている東京同窓会が 1 年に 1 度開催されているのですが、私も数年前になります、参加させて頂きました。その時の雰囲気はひと口に申し上げれば『何とつまらない会だろう。まるで年輩者だけの懇親会じゃないか、もう 2 度と参加しねえぞ』というのが率直な印象でした。原因は若者が 1 人もいない様な、居たとしても当時 30 代の自分より若そうな人は 1 人居るか居ないかという現実でした。当然、諸先輩達による幹事会等でアイデアを出し合って取り決めた内容と思いましたが、あまりにも新参加者が参加するには敷居が高いというか、同期の、若しくは後輩に声を掛けて次回の開催に誘いを掛けるという気には到底なれませんでした。

そこで思いついたのが、きっと自分と同じ気持ちや考えを持っている人が他に居るのではないかと、五日会の事務局長と相談し又先輩の顧問の後押しも頂き、本年の 1 月 5 日に決起したという経緯がございます。当然、会の名称は『能高五日会』と成ったのは言うまでもありません。しかしここで誤解されてはいけないのが、五日会とは、東京同窓会をより大きく、又若者にも参加しやすい親しみの有る会としての入門編とお考え頂ければ幸いであり、決して東京同窓会はツマランから割って出てやろうなどという考えは毛頭ございませんのであしからず。

入会資格は能代高校のOBで東京近郊に在住し『郷里を愛し、母校に敬意を抱いている事、そして自分は若者であると思っている事』です。

組織としては、役職等担当の係りを分担し、より強力な結果で運営を図ります。

活動としては、年間を通じて数回の呑み会が主な活動でございます。

ただそれだけの会なのですが、これがまた蓋を開けたらなかなか評判で会員も徐々にではありますが増加しつつあります。その上妙案として『会員倍倍計画』なるものがございまして、いわゆる会員 1 人が 2 人の仲間に呼びかけて会員を増やすという良質のネズミコウという訳です。

こんな小さな会ではございますが、とても楽しい内容です。どうか未永い応援をお願い致します。



での開催となったこともありましたが、最近のイベントでは納涼会と称して「屋形船」を貸し切りで開催することができました。

当日は女性 3 名に男性 11 名の参加があり、墨田区の越中島からの乗船とあいなりました。運河を突き進んでお台場で碇泊し、刺身や天ぷらをビールや焼酎、日本酒で流し込みながら、地元の名物である「深川飯」も堪能しました。アトラクションとしては、最若手の小野君とオペラ歌手の円（まどか）さんの歌の競演は、参加者と爆笑を感嘆の渦に巻き込んでいきました。“兩名ともすばらしかったよ！”とをいつつも、おかに上った時はいつもの酔い方とは、ちょっと違う皆さんのような気がしました。

大変な分、徳をしたような事もあります！幹事という立場上、勘定も済ませる訳ですが、お店によっては次回の割引券や格安宴会の案内などをもらえることもあります。

勿論、先輩方がやっている、上野の「きくち」さんや、新橋の「和作」さんには事前の打ち合わせ等で、使わせていただいております。

この会のモットーである「倍倍計画」にのっとり、一人一名は参加者を拡大していきますので、皆さんの入会を心待ちにしております。ちなみに、年会費は千円ぽっきりでございます。

寄稿 4

能高五日会の会計担当として

第 49 期 片谷 浩之

能代高校東京同窓会の、自称若者が組織する「五日会」において、不肖私が会計を担当することになり、何回かの会合の場所設定から会費徴収、会計報告までをやっております。会合と言ってもそのほとんどが「飲み会」であることから、当初は場所を何処に設定するか頭を悩ませていましたが、インターネット等の力を借りて、ある時は「お茶の水」またある時は「浅草」と実施してきました。

何しろ会員が東京近郊をはじめ、都内に点在しているため、なるべく中心地点がよかろうという会長の言葉もあり、「お茶の水」から始まった訳ですが、できれば個室が望ましいという声も頭にいれながらの場所設定です。参加人数の関係から（普段は平均 13 名）個室がとれずに、わいわいがやがやの中

第 25 期

佐々木 胤 麿

〒 299-0205
袖ヶ浦市上泉 1767-273
TEL 0438-75-4585

貸室業
(店舗・事務所・アパート)

管理者 熊谷 洋三
第 16 期

第 30 期
能代高校東京同窓会

幹事 熊谷 幸夫
(能代市出身)

〒 263-0051
千葉市稲毛区園生町 158-1
TEL 043-287-6887

〒 160-0001
新宿区片町 2-3
エステート絹 6F
新宿区荒木町 9-15 土田ビル
TEL 03-3355-2029
自宅 TEL・FAX 03-3878-0215

第 24 期

山 縣 輝 輔

〒 216-0004
川崎市宮前区鷺沼 4-1-9
TEL 044-877-0575
FAX 044-877-0575